

地域文化と向き合う生徒育成のための取り組み

— 地域に残る古地図・地名・伝承を活用して —

片山 健介 (逗子開成中学・高等学校)

1. はじめにー問題関心の所在ー

私学に通う生徒と地域の結びつきは希薄になりがちである。生徒は様々な地域から通うため、自身自身の住む地域と学校所在地域の双方について、地域の文化や伝承に触れる機会を持ちにくい。

また、学習指導要領・社会の各分野それぞれにおいて「地域社会との連携」「身近な地域の調査」「各科目間の連携」などがかけられるが、実際の取り組みにおいては、授業時間数の制限をはじめとして多くの課題が想定される。

本研究では、上記の現状認識のもと、私学生徒が地域文化と向き合い、主体的に考える場をどのように構築していくのか、という点を研究課題とした。しかし地域文化といっても多様である。今回は、地域に残る古地図・地名・伝承などを教育資源化するための方法を模索した。具体的には、勤務校に近い鎌倉を対象とした。「古地図研究プロジェクト」と名付け、近世から近代に作成された鎌倉の観光マップを収集し、その絵図を生徒とともに読み解く作業を試みることにした。『鎌倉絵図』などよばれる絵図は50余りが知られており¹、内容の詳細な検討・比較には複数年の継続した取り組みが必要であるが、今回の実践では絵図の分析数をしぼり、教育現場での活用方法を模索するという観点からその成果と課題を検討することとした。なお、実践を行う際には、以下の5点を特に意識した。

- ①教育現場における地図資料活用の可能性を提示すること²
- ②地域の歴史を掘り起こすことの意義を生徒に伝えること³
- ③博物館施設等とのより良い関係の築き方を模索すること⁴
- ④デジタルデータベースの教育現場における活用を模索すること⁵
- ⑤フィールドワークの効果的な実践方法を模索すること⁶

2. 古地図研究プロジェクト（略称「こちけん」）について

1) プロジェクトの結成

本校社会科では、中学校1年時に地理を、中学校2年時に歴史を学ぶ。2012年3月に地理の授業を終えた中学校1年生283名に対して、古地図に関心がある生徒、歴史に関心がある生徒を募った。結果、20名ほどの生徒が参加を申し出た。これ以降、古地図研究プロジェクト（以下、略称の「こちけん」を使用）として、週に一回のペースで集まり研究を継続した。

具体的には、澤寿郎・鈴木棠三篇『鎌倉古絵図・紀行 復元鎌倉古絵図』（1976 東京美術）所収の原寸大に復刻された絵図を対象に、トレース作業を行った。その上で、教員が生徒では解読できないくずし字部分について翻刻し、現代語版の絵図を完成させた。最終的には各絵図の比較・検討を目的とした。

2) プロジェクトの経過

[3月末～8月]

復刻版の絵図をひたすらトレースする作業をおこなった。明暦・万治頃の刊行が想定されている「相州鎌倉之図」から明治20年刊行の「相模国鎌倉全図」までの10図を対象とした。各絵図一枚あたり、

A3トレーシングペーパーを2～12枚ほどを使用した。単純作業ということもあり、苦労した生徒もいたが、知的好奇心の高い生徒が集まっていたこともあり、夏休み後に一応の完成をみた。

あわせて完成した地図を片手に鎌倉フィールドワークを6/22(土)、8/10(土)、8/28(水)の計3回実施した。実際の絵図でトレース作業を行ってきた寺社、旧跡、史跡をはじめ、鎌倉五山、鎌倉十井、鎌倉十橋などを中心に見学し、鎌倉全体の空間を把握することを目的として実施した。

なおこの段階で、この二つの作業を通じて、各個人の関心あるテーマを挙げてもらい、簡単な文章にまとめさせた。学内の「論文・創作文・感想文コンクール」や外部コンクールへの出品を行った。ただ残念ながら、夏休み期間を利用して生徒の自主性に委ねたため、「書き方」の指導を行うことが出来ず、内容についてはレポートや紀行文、感想文の域をでるものが少なかった。しかしながら、なかには着眼点が非常に優れた論考もいくつか提出されており、他の生徒の模範になるものもあった。例えば、絵図中の「農地」表現を比較することで、「絵図に対象が描かれていないからといって、そこにその対象がないとは限らない」という重要な指摘を導き出している作品があった。また、江戸時代にすでに史跡化していた「屋敷跡」の表現に着目し、対象絵図すべてについてその有無を確認し図表化した上で、現地を自身で歩き、大正から昭和にかけての記念碑建立の動きとの関係をまとめた作品があった。ともに論点は違えども、絵図研究の基本的なあり方を自分自身で考え、論理的にまとめた(まとめようとした)点が大変評価されよう。こういった読み解きは、文字を対象とする古文書類では簡単に出来ない実践であり、古地図や絵図類を教材化していく際の大きな可能性を示しているように思われた。

[9月～10月]

10/26(土)・27(日)の2日間にわたって行われる本校文化祭での展示発表のための準備期間とした。展示そのものは、「こちけん」の研究成果の途中経過について報告することを目的とした。各絵図の原寸大コピー図とトレース図のセットと各個人がまとめた小論をそれぞれ展示した。生徒にとっては、来場者との対話や来場者に取り組んでいただいたアンケート結果などによって、多くの励ましと今後の課題を得る大事な機会となった。

[11月～2月]

今までトレースした絵図以外の絵図のトレースを行い、各個人の関心に従って小論をまとめるための準備を行った。また、神奈川県立歴史博物館(11/16(土))を見学し、展示中の実物の「鎌倉絵図」を調査した。生徒からすると今まで自分たちがトレースしてきた絵図と同類の絵図をケース越しに見ることで、実物資料の大切さや博物館の位置づけについて改めて考える良い機会となった。また、神奈川県博では、県博所蔵の絵図5点をデータで借り受け、今後の研究対象に加えることにした。生徒にとって、博物館側との交渉の経緯を知ることができたこと、研究の対象がこのように増えていくことを間近で感じ取ることができたことの二点は、大きな収穫であった。

また、「こちけん」の活動とは若干ずれてしまうが、生徒達が作成したトレース図は、本校中学校2年生(「こちけん」参加生徒在籍学年)が、「文学歴史散歩」という学年行事で鎌倉を訪れた際、課題に使用した。この課題では、鶴岡八幡宮境内の部分図を提示し、現地の景観と比較することで、「廃仏毀釈」の実態や「神仏習合」の「鶴岡八幡宮寺」の実態などを読み取らせることを目的とした。

3. おわりにー研究の成果と今後の課題ー

以上の実践をふまえ、「はじめに」において掲げた5点について成果と課題をまとめておく。まず第1点目である教育現場における地図資料の活用については、トレースし比較検討するという地図利用の一つのあり方を示すことができた。古文書という文字資料をじっくり検討する時間も大切であるが、地図資料は、比較的容易に歴史的思考を訓練する機会を提供してくれることを示すことができた

と考える。くずし字などの文字資料については、教員による釈文や現代語訳が必要になるかもしれないが、絵画資料からは生徒なりに読み取った内容を生徒自身でまとめることができる。生徒の感想の中には、古地図から地形以外の情報を読み取ることの面白さを率直に述べたものが多かった。古地図を身近な地域のなかで読み解く試みは大きな可能性を秘めているといえよう。

第2点目の「地域の歴史を掘り起こすことの意義」も伝えることができたと考える。生徒各自は、自分自身が担当した絵図と向き合うことで、他の絵図との相違をいくつも発見することができた。こういった小さな喜びの積み重ねが地域文化に対する関心を涵養することにつながるのではないかと考える。鶴岡八幡宮の境内の描き方に興味をもったある生徒は、自分自身の地元の図書館で鎌倉に関する辞典類にとどまらず、『鎌倉市史 社寺編』や『新編相模国風土記稿』などを手に取り、独自に調査を行っていた。今後は、こういった生徒を核にグループワークに移行させることが課題である。

2点目の課題と密接に関わるのが、第3点目の博物館施設との関係である。多くの学校が抱える課題であろうが、博物館と学校は来館利用をするとその来館一回で完結してしまうケースが多い。あるいは、来館することそのもので満足してしまうケースも多い。そういった中で地域の博物館との協力関係をどのように築くかは大きな課題⁷である。今回の取り組みでは、神奈川県立歴史博物館を訪れたが、今後どのような関係を構築していくかは課題とせざるを得ない。ただし、神奈川県博では館蔵の絵図を研究の対象に加えていただいた。こういった実物資料、モノ資料を仲介にして、関係を築いていくことが望ましいと思われる。また第四点目とも関わるが、各博物館で公開されるデジタルデータベースを活用した授業実践を行っていくこともあわせて今後の課題としてあげることができる。

第4点目の教育現場においてデジタルデータをいかに利用するかという点については、紙幅の都合もあり詳細に論ずることが出来なかった。今回の実践では、国立国会図書館のデジタルデータベースで公開されている『新編鎌倉志』の絵図部分をすべてA4版の写真用紙にカラー印刷し、トレースした絵図との比較を行った。以前は、刊本や所蔵場所から直接写真等を入手するしかなかったが、データベースの普及によって自由に活用できるようになっている現状は、研究者のみならず教育者にとっても大きな可能性を持っていよう。今回は『新編鎌倉志』との比較に留まってしまったが、次年度以降の「こちけん」では、フィールドワークにおいて「今昔マップ2」⁸などを使用しながら明治期の迅速測図なども活用しつつ現地を歩く予定である。また、ICT教育の進展を見極めつつ、地道に実践例を積み重ねていきたい。

最後の第5点目の「フィールドワークの効果的な実践方法を模索すること」については、3回の鎌倉巡検を実施したものの、「効果的な」という点の追究には至らなかった。しかし今回紹介したトレース図を作成し現地を歩くという取り組みは、来年度以降、学年全体で実施する鎌倉見学等の学年行事のなかに組み込むことが出来ないか検討している。その際には、今回の実践をヒントに「生徒に主体的に考えさせる」プランや課題を用意できるのではないかと考えている。

以上簡単に総括させていただいた。今回の古地図を活用した実践は、各地域に残る荘園絵図や境内図、国絵図、名所図会、街道図などを対象にしても、着眼点を変えることで実践できるように思われる。また、地図以外の、地域に残る資史料、民俗事例やまつりなどをも積極的に活用することで、生徒の歴史的思考を養い、地域への関心を涵養することが出来るはずである。それは、私学生徒にとって地域とのつながりを再認識する大事な機会になろう。また、「こちけん」の年間活動を通して学んだ方法論は他分野を「学ぶ」際に参考になるであろうことは間違いない。以上の2点を確認した上で報告を終えたい。

【「鎌倉」の古絵図に関する主な参考文献・論文等一覧（注以外）】

- ・神奈川県立金沢文庫 2012『企画展図録 鎌倉めぐり』金沢文庫
- ・神奈川県立歴史博物館 2013『図録 江戸時代かながわの旅―「道中記」の世界―』神奈川県立歴史博物館
- ・鎌倉市 1987『鎌倉市史 近世史料編第二』吉川弘文館
- ・澤寿郎 1976『鎌倉古絵図篇』東京美術
- ・鈴木良明 1996『近世仏教と勸化』岩田書院
- ・原淳一郎 2007『近世寺社参詣の研究』思文閣出版
- ・飯島秀民 1983「東北大学附属図書館蔵『相州鎌倉之本絵図』」『三浦古文化』第34号 55～60
- ・加藤紫識 2001「鎌倉名所記-版行とその周辺-」『東洋大学大学院紀要』第38集〈文学研究科〉299～324
- ・神田茂 1967「鎌倉の古版絵図」『金沢文庫研究』第135号 4～9
- ・白石克 1977「『鎌倉名所記』諸版について」『斯道文庫論集』第14篇 307～343
- ・白石克 1983「江戸時代の鎌倉絵図-諸版略説-」『三浦古文化』第34号 61～100
- ・白井哲哉 2009「近世鎌倉寺社の再興と名所化 - 十七世紀を中心に」『近世の宗教と社会1』吉川弘文館 271～296

注)

-
- ¹ 鈴木良明 1996「鎌倉絵図と在地出版」（『近世仏教と勸化』岩田書院 249～262）による。
 - ² 中学社会科や高校地理歴史科において、様々な史資料を活用することの必要性は言を俟たないが、古地図や絵図類は中でも大変可能性のある史資料であると考えられる。なお、絵図を教育現場において活用する諸条件はある程度整ってきた。例えば、杉本史子ほか編『絵図学入門』（東京大学出版会 2011）は、「はじめての総合的な入門書」と銘打っており様々な絵図類を解釈する際に有益である。また、データベースの公開によって容易に絵図類を手にすることが出来るようになりつつある。
 - ³ 継続した研究を続けるためには、生徒の知的好奇心を満たす仕組みが常に必要である。幸いなことに、地域史には、身近にある地域だからこそ生徒を飽きさせない素材が多くある。本研究において紹介する絵図類に加えて、石塔類の調査や地名調査、聞き取り調査などをあげることができる。生徒に目に見える成果を提示することは、大きな達成感を与える近道であろうし、地域の歴史や文化への関心を涵養するまたとない機会になるはずである。なお、今年度の全国歴史教育研究協議会 第五十四回神奈川県大会第二分科会では、「様々な地域資料をどう授業に取り込むか」というタイトルのもと実施された。特に西形久司「地域資料から戦争のリアリティをさぐる」報告では、自治体史編纂の経験を元にした様々な史資料の紹介がなされた。本稿においては近世資料を対象としたが、地域に残された近現代史資料の丹念な読み込みは、中高の教育現場において今後の大きな課題であるように思われる。
 - ⁴ 博物館と学校がどのように継続した関係を築いていくかは大きな課題である。その中で国立歴史民俗博物館において二年ごとに募集される博学連携研究員の活動は、一つのあり方を示している。詳細は、隔年で刊行される博学連携研究会議実践報告書や同館ホームページを参照されたい。
 - ⁵ 片山健介 2011「前近代地図の想像力に挑戦する」（『学校と歴史をつなぐー平成22・23年度博学連携研究会議報告書ー』）において、絵地図等を参照できるデータベースを簡単に紹介したが、どのように活用するかについては実践例を積み重ねる段階にある。また各研究機関や大学公開のデータベースなどの教育現場における活用も同時に模索すべきである。国立公文書館アジア歴史資料センターホームページにおいて閲覧出来るインターネット特別展などの活用を検討することも興味深い。
 - ⁶ 本校では社会科のなかで社会科見学（2013年度は中1時に横浜、中2時に鎌倉）を実施しているが、ある一定程度の成果は毎年挙がるものの、学年全体（280名前後）で訪れることもあり、「現地に行くこと」で完結してしまっている点が否めない。多くの学校が抱える大きな課題であると思われる。
 - ⁷ 玉村雅敏編著『地域を変えるミュージアム』（2013英治出版）では、30のミュージアムが紹介される。本書で紹介される、地域を巻き込んで活動を続けるミュージアムの動きには、教育現場において実践を考えようとする私たちにとって学ぶべき点が多くある。
 - ⁸ 埼玉大学教育学部谷謙二研究室のホームページで配布されている時系列地形図閲覧ソフト「今昔マップ2」（<http://ktgis.net/kjmap/function/index.html>）では、1880～85年のフランス迅速測図から2014年の空中写真にいたるまでの各時代の地図を比較することができる。